

「会員短信 67」

「超絶技巧の感激」

柳 紅生

高齢となり、家業の商いも止め、趣味三昧の日々となって、陶芸教室に通い始めました。昨年末から、今年の干支の「龍」の像に挑戦しています。角は何度も折れ、造り進めるにつれて重さが増すので内側を削りました。胴体と尻尾のうねりを際立たせ、北斎の波頭のような動きを入れるなどして作品の思案を重ねています。およそ六十センチほどの作品になる予定ですが、陶芸の先生曰く、「大きさが二倍になると労力は四倍かかる」そうです。

[テキスト ボックス]先日、勉強のために、富山県の水墨美術館で開催されていた「超絶技巧、未来へ！明治工芸とそのDNA」展に出かけました。再評価が更に高まっている明治工芸と並んで、木彫、漆工、陶磁、ガラスなど、様々な素材を扱う現代作家の作品が展示されていました。中でも印象深かったのは、木彫の菊の花でした。誰も生き生きとした盛りの菊を作ると思われますが、まさに瀕死の枯れた菊が表現されていました。この作品には、作者の「命」を考える奥深さがあると感じました。

また、最も驚いたのは、木彫の花瓶に活けられた木製の月下美人の花でした。水を注ぐと花が開く仕掛けになっているのです。信じられない技術、趣向です。作品に魂を入れるとは、まさにこのことだと恐れ入ると同時に、感動で一杯になりました。そして、自分はこんな気持ちで俳句を作っているかな、陶芸を制作しているかなと反省しました。はてさて、我が龍はどんなふうになるのでしょうか。